

しよ 死与の少女

こうき まと
～ 光輝を纏いし想い ～

CONTENTS

序章 勇み咲く花々.....	3
すれ違う視線.....	39
思い出.....	71
奪われた希望.....	108
信じる心.....	136
救うための戦い.....	159
光輝を纏いし想い.....	204
終章 虹の彼方に.....	226

登場人物紹介

特務騎士・トリカブト

世界花から『進化』の祝福を受けた花騎士。害虫に滅ぼされた里の生き残りであり、自ら里を抜けて団長に拾われた過去を持つ。武器は権杖『ガブリエル・ラチェット』と黒狼の使い魔。自分を支えてくれた団長に想いを寄せている。

特務騎士・カトレア

類まれな才能と高い実力を持つ少女。トリカブトの先輩であり、彼女同様に団長へ一途な想いを抱いている。武器は『魅力の魔杖』と名付けられた杖を用いた核熱魔法。

特務騎士・アネモネ

『セントフローレス』最古参の花騎士。トリカブトを妹のように可愛がっている物静かな少女で、カトレアとは同期。カトレアとともにバナナオーシャンにて新調した戦装束を身に付けている。愛用の武器は紫紺の刃を持つ『雷龍槍』。

セントフローレス騎士団・団長

トリカブトたちの団長を務める長髪の青年。飄々とした態度を取っているが、その奥では実直な面を持つ。部下の花騎士に対しては全幅の信頼を寄せている。

ウィンターローズ王国騎士団 上位騎士・ブラックバックラ

『死の薔薇』の二つ名で呼ばれる騎士団最強と謳われた女性。常に黒い和服を身に付けており、危険な雰囲気漂わせている。戦闘では『黒薔薇の太刀』を用いた我流剣術を放つ。

ウィンターローズ王国騎士団 上位騎士・ハツユキソウ

汚染害虫調査隊隊長に任命されているトリカブトと同年代の花騎士。常時体温が低くなる特殊体質の持ち主。

ウィンターローズ王国女王・ノヴァーリス

北国ウィンターローズの若き女王。民の間ではアイドル的存在であり、高い支持を受けている。彼女の側では王室警護隊所属の花騎士、ロイヤルプリンセスが常に警護をしている。

序章 勇み咲く花々

「いきなり敵に襲われるなんてッ！ 不幸ですうッッッ！！」

北国ウインターローズの最北東端に広がるヘリアル丘陵。

その猛吹雪に覆われた雪景色の上で、少女の叫びが響き渡る。

フラウナイト

花騎士ハツユキソウは情けない顔と声を露わにして脅威から逃げていた。純白の和服に包ま

れた肢体を懸命に動かし、必死に後ろをついてくる部下たちともに逃走劇を繰り広げている。彼女たちはウインターローズ王国騎士団所属の花騎士フラウナイトであり、ハツユキソウは彼女たちの隊長だった。

「ハツユキ隊長！ 来ますよ、あの化物たちが！！」

最年少の花騎士フラウナイトが荒い息を混じえながら言います。自分たちの後を追っているのは人類の天敵、害虫だ。

「無駄口言うなら、とにかく逃げるんですよオッ！！ 喋る暇いとまが、どこにあるんですかッ！」

振り向いた後で部下にそう返し、今一度前を向く。目指すは南の方角にある駐屯地だ。ここからだ直線距離にして約十キロメートル程度であり、距離そのものは花騎士フラウナイトにとって大したものではない。

だが自分たちが踏みしめているのは雪原だ。深い雪は重くて冷たく、容赦なく体力を奪って

くる。

背後に視線を向ける。自分たちを追いかけてきているのはそれらの環境に適応したサソリ型害虫だった。

無数の黒い体のサソリたちが、巨大なハサミを打ち鳴らしている。いずれのサソリも、彼らは人の背丈の五倍程度も誇る巨大な体を持っていた。それを支える太くたくましい八脚が、雪煙を上げながらうごめく。

そして、ただの害虫ではない。

黒いサソリたちの体のいたるところに、蒼く光るまだら模様が見え隠れしていた。自然の色合いにはない、その濁りのこもった光は、銀世界の中で異質な存在感を放っている。

「汚染害虫に襲われるのが嫌なら、後先を考えず今を一生懸命ですッ！ 追いつかれたら最後ですよオッ！」

「[[[はい!!!]]]」

フラワースナイト
花騎士の新たな脅威。それは汚染害虫と呼ばれる害虫の変異体だった。九ヶ月前、スプリングガーデン全土を巻き込んだ「汚染害虫事件」とよばれる騒動の後で、世界各地で確認された未知の害虫たちだ。

汚染害虫の際立った特徴としては、通常の害虫とは一線を画した強さを誇り、外見には着いまだら模様が現れていることだ。性格も狂暴となり、力任せに暴れまわりながら人々に被害を

与えている。

——ああ不幸です……！　なんでこんな大変な目にッ！

そして今はハツユキソウ率いる汚染害虫調査隊に対して牙を剥いていた。

故郷のバナナオーシャンからこの国に移籍したハツユキソウは、世界花から授かった恵まれた加護と戦果から、着任して早々に隊長という大層な肩書きを与えられてしまった。後ろの四人の部下たちはその時からの付き合いである。

今朝はその調査の一環として、目撃情報のあった場所……ヘリアル丘陵北部に広がる雪原に向かっていたのだ。

——この状況で、優先すべき行動は……！

焦りは拭えないが、ハツユキソウの頭の中は不思議と冷静だった。自分以上に慌てた人間を見たからなのかもしれない。

ハツユキソウは最小限で振り返り、今一度敵と自分たちの状況を把握する。自分たちを追ってくるサソリは十匹。その内、先頭にいる一匹のみが赤い派手な体色をしていた。明らかに体は大きく、力強い動きをしている。

加えて、赤いサソリの全身には同種の中で争ったと思われる古傷がいたるところにある。間違いのない。サソリたちのボスだろう。

群れのボスを退かせることができれば、取り巻きの黒いサソリたちも退いてくれるかもしれない。

ない。

「このお！ 追いかける方だからって図に乗ってッ！」

そう思っていたところで、血気盛んな部下の一人が声を上げた。彼女は右手に光球を生み出し、それをサソリたちに撃ち放った。体内に流れる魔力を集めて相手にぶつける、初級魔法の魔力光弾だ。それは弱点にさえた的確に当てれば十分な威力を持つ。

しかし、光弾は黒サソリの一匹に命中した途端、光の粒を散らしてあっけなく消えてしまった。花騎士フラワーナイトの魔力が一切通じていないのか、直撃した光弾に対しひるんだ様子もない。

「バカッ！ 無駄なことしないで走りなさい！ 倒せる相手なら逃げはしないでしょ！」

「そうはいうけど、私たちは花騎士フラワーナイトだろ！ 怖気づいて害虫から逃げるのが役目なんかじゃない！」

光弾を撃った血気盛んな少女に対し、別のおとなしそうな少女が行為を咎めていた。「下手に体力を使うな」と言いたかったのだろう。ただでさえ雪道で自分たちの疲労の度合いは高い。応戦など無意味だ。並大抵の攻撃では汚染害虫に攻撃は通じないのだ。

「あなた達、喧嘩している場合ですか!? この状況でッ！」

思わず、ハツユキソウはそう怒鳴ってしまった。このままでは駐屯地に辿り着く前に全滅する。臆病だが聡とくいハツユキソウにはその未来が見えていた。自分たちが倒せないサソリが十匹もいるのだ。疲労でこちらのスピードは徐々に落ちつつあるが、彼らにその様子は見受け

られない。

——尾が……！

ふと、赤いサソリの尾の先端部が蒼く光ったことに気付く。その瞬間背筋が凍った。直感が「よけろ」と何度も急ぎ立ててくる。

「みなさん！回避ッ！」

指示未満の叫びだが、それだけで部下は行動に移った。それくらいにはハツユキノウと彼女たちの付き合いはあった。密集して走り続けていた全員が一斉に跳躍して、その場から散り散りとなる。

直後、自分たちが先程までいた場所に光と衝撃が襲ってきた。赤いサソリの尾から撃ち放たれたのは直線状の熱線だった。魔力を凝縮し、花騎士フラワーナイトの体を貫く光条として撃ち出してくる。なんとか全員が躲かわすことができたが、次発はすぐに襲ってきた。連続で撃ち放たれる蒼炎の矢が次々と襲いかかる。

「どうすればいいんですか？ハツユキノウ隊長ッ！」

部下の一人、おとなしそうな少女の必死な声が打ち付けてくる。

——言われなくても分かっていますよおッ！

正直、頭の中はもういっぱいだった。

頼れる味方がどこにもいない。自分たちは死ぬかもしれない。戦いへの恐怖が胸の裡うちに湧き

上がる。臆病な性格が、和服の下で震えとして現れていた。他に誰もいなければ、今頃自分は
大泣きしながら無様に走っていたかもしれない。

しかしハツユキソウは隊長としてのプライドを持っていた。泣き叫びたいその衝動を理性で
必死に押さえる。どうすればこの危険から逃れられるかを考える。

結論はすぐに出た。たったひとつのシンプルな解決法。

「ああもう、私に任せて下さい!! みんなは駐屯地へ逃げてくださいよおッ!」

「ハツユキ隊長!」

それは自分がオトリになることだった。相手の狙いを自分が集めれば、残りが生き延びられ
る可能性は高い。

そしてハツユキソウは高い実力を持っている自覚があった。伊達に隊長を任せられたわけで
はない。こんな自分でも、階級は上位騎士。俗に言われるエリートだ。

「皆さんはさっさと逃げて、人を呼んでください!」

「ハツユキ隊長が身代わりになるんですか!? そんなの隊長らしくないですよ!」

そうだ、らしくない。自分でも気の迷いと思えない。自らを犠牲にして誰かを逃がすだ
なんて、絶対にやりたくないことだと思っている。

「——あなどらないでくださいッ!」

でも、体と口が勝手に動いてしまう。

「私なら、ある程度は戦えるし、皆さんよりも早く走れます！ だからみなさんはさっさとどっかに行っちゃってください！」

部下の反論になけなしの意地で突き返す。今の自分なら、時間稼ぎはできるかもしれない。サソリたちへと身を翻し、体中に流れる魔力を右手に集めて、杖の形にする。氷の短杖を構えて、ハツユキソウは穢れた害虫に対峙した。

「隊長！」

部下の声を振り切り、空いた左手でざわつく胸を抑える。

——ああもう、こんなバカなことをやるなんて私もどうかしてます！
そんな事を心の中で吐き捨てて、氷杖を振るった。ここから先は通行止めだ。

「行きますよ！」

裂帛の叫びのままにハツユキソウは氷杖を掲げ、空を仰ぐように横振りにした。杖の先端部から冷気をまとった白銀の光が散りばめられる。

「頭上注意ッ！ フリギットミサイル！」

そう叫んだ直後、振りまかれた光の粒子は巨大な氷の塊へと姿を変えた。魔力によって大気の水分子を凍らせ、相手へと撃ち出す氷結魔法『フリギットミサイル』だ。魔力によって道理を無視して作り上げられた氷は、サソリの体軀を覆い隠せるほどの大きさを誇り、その先端部は鋭利な槍のようにとがっている。

「ええいッ!!」

杖を振り下ろすと、空中に停滞していた氷塊はサソリたちへ撃ち出された。サソリの真芯に次々と巨大な氷たちが流星群のように襲いかかる。硬いサソリの外骨格を貫いた痕からは、黒々とした害虫の体液が雪の大地に流れ落ちた。

しかし、ハツユキソウの攻撃は決定打とはならなかった。戦いへの恐怖が魔法の威力をわずかに弱めたらしい。身に震わせて刺さった氷を弾き返したサソリたちは、痛みからか金切り声を上げた後で蒼く光る眼を一斉に向けてきた。

「ひええっ！ こっちに！」

今までの戦いで『フリギットミサイル』は害虫を一撃で葬ってきた。その予想打にしない状況にひるんでしまう。ハツユキソウは鳥肌が立つのを感じながら反転し、西の方へ走りだす。南へ向かった部下たちへサソリが向かわないようにするためだ。

「はあ……はあ……！」

膝まで深く、泥のよう重い雪を感じながら荒い息を吐き続ける。

ひどい吹雪だ。地平線が見えなかったが、記憶が正しければこの先に森があったはず。そこに潜り込んでやり過ごせば姿を隠して逃げられるかもしれない。オトリなんて言葉は、なにも無策で言い出したわけではなかった。

——それにしても、害虫も元は人間の同胞だと言うのに……どうして殺し合わなきゃいけな

いんでしようか……?」

逃げている間にそんな考えが脳裏によぎった。「害虫」は人間に仇^{あだ}なす虫たちの総称だが、元は『益虫』と呼ばれていた人間のパートナーなのだ。

彼らは、死にゆく世界の支配者、と呼ばれる存在によつて人間と敵対し、各地で人相手に殺戮と破壊を撒き散らす存在へとなり果ててしまった。本来虫を殺すことは人を殺すことと同じくらい忌避されるべきこと。

ハツユキソウは優しい少女だった。だから害虫に杖を向けることも本当は嫌で仕方がない。

「っ！」

そこまで考えていたところで、再び熱線の衝撃が伝わってきた。爆風で前のめりに倒れてしまふが、最短で立ち上がって走り続ける。やはり、あの赤いサソリだ。どうやらあの個体のみが他の黒いサソリたちとは違い、熱線を撃つことができるようだ。

「ふふん！ 追いつけるものなら、ついてきてみてくださいさいー！」

強がりをお口にする。そうしなければ、足にまわりつく雪に体の熱と一緒に気力まで奪われそうだったからだ。

走り続けていると、西側の森がかすかに見えてきた。後もう少し。逃げきれればこっちのものだ。

「うひゃあああッ!?」

だが、現実にはハツユキソウの浅はかな考えを凌駕した。

あの赤いサソリが急に加速して、ハツユキソウの体を飛び越えてきたのだ。前に赤いサソリ、背後に九匹の黒いサソリに囲まれて挟み撃ちにされる。赤いサソリは再び熱線を吐き出そうとハツユキソウに尾を向けていた。

冷や汗を吹き出しながら立ち止まる。打つ手がない。自身の攻撃が通じない害虫たちに逃げ道を奪われて、諦めが心の中を支配してくる。ハツユキソウはその場で膝立ちになり、尾に集う蒼い光を見つめていた。

——ああ、私の人生もここまで……儂くて不幸ばかりの日々でした……お父さん、お母さん、ごめんなさい。私は故郷のバナナオーシャンいくさばに帰れません。

敵の姿を見据える。「雪女は戦場で華々しく散った」と、騎士団では噂になるのだろうか——自分のあだ名をネタにする騎士団の人々の顔を思い出しながら、握りしめていた氷杖から力を緩めようとした。

「……大丈夫。諦めないで……ッ！」

絶望に飲まれたその時だった。

突如空から声が響いたかと思えば、前後のサソリたちの全身に幾つもの爆炎が吹き荒れた。

「……えッ!」

——核熱魔法……?」

ハツユキソウは知識だけ知っていたその魔法を目の当たりにした後で、声の方に向く。空から迫る人影が長い棒のようなものを携えて降りてきた。その先の空には、黒い点のように見える影が二つある。

「貫いて! 雷龍槍ッ!!」

藤色のセミロングをなびかせた少女が、空から落ちながら叫ぶ。さっきの声だ。右手に紫紺の槍を掴んでいた彼女は勢いのままに赤いサソリの頭へ得物を突き刺した。直後、空気の弾けるような音が鳴り響き、紫紺の稲光がその巨体を灼き尽くした。その電撃魔法と、軽装の鎧を身に着けた少女の姿を目にして、圧倒されながらハツユキソウは気付く。

——あの人、確か写真で見たような……!」

その姿には見覚えがあった。全国の騎士団の間で交わされる機関紙で知った凄腕の槍の使い手。

「アネ、モネ……さん!」

頭に思い浮かんだ名を呼ぶ。プロッサムヒルで有数の槍使い、アネモネ。害虫に対し幾度も戦果を上げてきたことでその筋では有名な少女だ。

彼女がなぜここに? そんな疑問が浮かぶよりも先に、アネモネは赤いサソリに対して槍を

さらに深く突き刺した。

「これでッ！」

周囲に響き渡るほどのサソリの悲鳴が轟く。赤いサソリはハツユキソウの前から離れ、取り付いたアネモネを振り落とそうとやたらめったらに体を振り回していた。その暴れようはまるでロデオの光景にもみえる。暴れた赤いサソリの振り回すハサミが、取り巻きの黒サソリの体をえぐり取った。その後で赤いサソリは南の方へ逃げ出していく。

——やった！

赤いサソリが離れていくのを目の当たりにして、ささやかな喜びが心を満たす。しかし、まだ終わりではない。残りの黒いサソリたちが、倒れているハツユキソウの前でハサミを構えている。そのうちの一匹が両ハサミを広げながら突進してくる。アネモネとの距離は開いている。間に合わない——！

「ひえっ……！」

「大丈夫、心配しないで」

アネモネの穏やかな言葉の後で、再び火球が降り注いできた。最初に空から落ちてきた、あの核熱魔法だ。いくつもの火球の礫が周囲に降り注ぐ。そのうち、三匹の黒いサソリが力なく雪の上に崩折れる。どうやら急所を貫いたようだ。生きていた残りの六匹の体も既に深いやけどを負っていた。

「いこ……もうひとりの、私」

さらに、空から落ち着き払った少女の声が開こえてきた。虫の息と成り果てたサソリたちへ、空から黒い影が降り注ぐ。そのシルエットが狼の形をしていることに、ハツユキノウは辛うじて気付いた。獣たちは大きく口を開いた後で、二匹のサソリをむさぼり始める。

そして、噛み砕く。獣は硬い外骨格をまるで氷菓子でも食べるように咀嚼した。巨体が獣の口の中へと消えていくのにそう時間はかからなかった。獣が残骸と成り果てたサソリを満足そうに嚙下し、高らかな咆吼ほうこうを上げる。

「ごっくん、なの……」

アネモネの仲間だろう。苛烈な獣たちを操っていたのは、黒いゴシックドレスをまとう小柄な少女だった。彼女は長いツインテールの黒髪を揺らしつつ、自身の背丈ほどもある権丈の上に腰掛けていた。茫洋ぼうやうとした眼差しで、食い散らかされたサソリの残骸を眺めている。彼女が右手を軽く降ると、使い魔の獣たちは霧散する。残った四匹のサソリは恐れをなしたように吹雪の向こう側に消えていった。

突然の状況に何が起きたのか頭が追いつかない。

ただ一つ分かるのは、自分は彼女たちに……圧倒的な強さを持つ花騎士フラワーナイトに助けられたということだ。

「……ケガはない？」

周囲を警戒した後でアネモネが手を伸ばしてきた。つい先程まで苛烈な戦いをしていたとは思えないほどの、優しい声。

「あ、ありがとうございます……でもなんで貴方が……確かアネモネさんは、ブロッサムヒルの……」

突然の状況に戸惑いながらもぼつりぼつりとハツユキソウは問いただす。隣国の所属の彼女がなぜここに？

「私は……私たちは、ブロッサムヒル所属、セントフロレス騎士団。その特務隊のリーダーを務めるアネモネです。ハツユキソウさんたちの事情は既にノヴァーリス女王陛下から把握しています」

「じゃあ、空のお二人も……？ さっきの炎と、狼を操ったのは……」

ねずみ色の空に目を凝らすと、黒の少女に続いて紅い少女がこちらへと高度を下げてきているのがわかる。

「うん。私の仲間……トリカブトとカトレアだよ」

アネモネは誇らしげに二人の名を呼び、誇らしげな表情を浮かべていた。

《カトレア、トリカブト、残りを掃除しよう。貴方たちは逃げたサソリをお願い》

「うん、まかせて……！」

トリカブトは使い魔で助けたハツキソウの無事を確認した後、胸元から聞こえてきたアネモネの声に応える。交信魔石と呼ばれる希少な道具を用いた会話だ。

「引き受けたわ、アネモネ。私の故郷で好き勝手に暴れる害虫は、全部灰にしてやるんだから」隣にまで降りてきたカトレアがそう言う。その後で彼女は愛用の武器、魅力の魔杖^{まじょう}を巡らせて戦場の空を飛翔した。トリカブトも後に続く。

——まさか、こんな形でこの国に戻るなんて……

生まれ育った祖国。

永久凍土に閉ざされたウィンターローズの雪原。

記憶の中にかすかに眠っていた景色と同じ光景に、心が震える。

——この世界の環境を穢す汚染害虫、全部わたしが斃^{たお}してみせるの……！

トリカブトたち、セントフロレス、特務隊は、特殊任務の討伐対象である、汚染害虫を根絶するためにこの国へ来た。九ヶ月前の汚染害虫事件で全滅したはずの彼らが、再び各地で暴れている。その情報は、事件に深く関与したトリカブトにとつて見過ごせない危機だった。

もうこれ以上、汚染害虫に好き勝手させるわけにはいかない。トリカブトは魔力で強化した視力を使って、吹雪の雪原を細かく見渡す。

すると、見つけた。景色の片隅に一匹の黒いサソリが見える。どうやらサソリたちはそれぞれバラバラに行動しだしたらしい。そして見つけたサソリは二人の花騎士^{フラワーナイト}と交戦していた。ハ

ツユキソウが連れていた調査隊の花騎士^{フラワーナイト}だろう。既に彼女たちはサソリの尾によって突き飛ばされ、今にもハサミの餌食になろうとしていた瞬間だった。

「カトレア、他のサソリをお願い……ッ！ 私、助けに行ってくる！」

「ちよつと！ 勝手に飛び出さないでよ！ ……しょうがないわねッ！」

見過ごす訳にはいかない。トリカブトは先ゆくカトレアにそう言い渡し、前に出た。自身の体に浮遊魔法をかけて、腰掛けていた権杖^ツガブリエル・ラチュエツト^ツを掴んだ。滞空しつつ、杖の先を黒いサソリへと向ける。権杖の先端にある装飾のドクロが紫色の魔力光を灯した。

「みんなを守ろ。もうひとりの私……ッ！」

精一杯の力を込めて、静かに叫ぶ。緩やかに着地したトリカブトは権杖に備わる鋭利な刀身を地面に突き刺した。

「行って」

刃を中心に円状の幾何学模様——魔法陣が地面に広く映し出される。魔法陣はそのまま黒いサソリの立つ地面を飲み込んだ後、その周囲に再び黒い獣を呼び出した。杖の名前から^ツガブリエル^ツと名付けた、黒狼の使い魔だ。トリカブトの闘争本能から生まれたそれらは低く唸りながらサソリに狙いを定めている。

「遠慮はいらない……ガブツて、食べちゃえ……！」

そして、喰らい尽くす。

寡黙なトリカブトの裡うちにある戦意が、黒狼の雄叫びとなる。サソリの外骨格を無残に引き裂いた後で、その亡骸を魔法陣の中に引きずり込んで虚無かえに還した。

「……ふう」

カブリエル〴が喰らいつくしたサソリの残骸が自身の魔力になるのを感じる。トリカブトは使い魔が食べた害虫から魔力を吸収する類まれな特性を持っていた。カブリエル〴が害虫を食べれば食べるほど、トリカブトの魔力は強くなっていく。九ヶ月前のときは魔力が暴走したときもあつたが、今のトリカブトはあのとときよりも世界花の加護が高まっていた。もうなんともない。

今の自分なら、前よりもっとたくさんの人を守れる——！ そんな想いが、更にトリカブトの体を突き動かした。

「うん、もう一人のわたしガブリエル！ もっと、好きに暴れよッ!!」

自身の分身であるカブリエル〴もまた、敵を食べられることに喜んでいようだ。心に伝わってくる獣の高揚感が心地いい。澄み渡るような気分でトリカブトは次のサソリを見つけようと再び飛翔した。程なくしてサソリは見つかった。今度は二体同時で花騎士フラワーナイトを襲っていた。

時間を掛けるつもりはない——！ 今度は更に魔力を込めて権杖を大地に突き刺した。今度は一匹二匹の召喚ではない。自分が思い描く、心の中に存在する全ての獣たちだ。

「行くよ……ッ！ ガブリエル・ラチエツトッ！」

権杖の真名を発声し、己の持つ最大の魔法を解き放つ。

それまで以上に巨大な魔法陣が広がり、二匹のサソリを包んだ。大地に描かれた魔法陣の内側で、何十、いや、何百の獣の顎が一斉にサソリへ襲いかかる。

全てが「ガブリエル」。闘争本能から生まれた妖犬たちだ。揺らぐ双眸をギラつかせて黒狼たちは容赦なくサソリを葬う。あらゆるものを溶かし尽くすヨダレがサソリの体へとしたり落ちた。ジュツという音とともに外骨格がもろくなり、サソリが残骸へと変わっていく時間はそうかからなかった。

その様子を赤い瞳で眺めた後で、トリカブトは助けた二人の花騎士フラワーナイトに告げる。

「頑張つて……ッ！ 後もう少しで駐屯地だから……！」

そう言つてトリカブトは浮遊魔法を杖にかけて再び飛翔した。残りの調査隊の花騎士フラワーナイトがいなかを探す。記憶が正しければ黒いサソリは後一匹のはずだ。

全速力で南の方へ向かうと、最後の黒いサソリが程なくして見つかった。三人の花騎士フラワーナイトたちに襲いかかっている。

「えっ……!?!」

しかし、先ほどと同じようにサソリに近付こうとしたときだった。

突然大砲にも似た音が鳴り響く。紫紺の雷が黒いサソリを貫いていたのだ。その事に気付いた後で、地上から勇ましい少女の声が届いてきた。

「今だよ、ハツユキソウさんッ！」

「任されましたッ！」

アネモネだ。彼女はハツユキソウと呼吸を合わせて最後の黒いサソリへと躍り出た。彼女は槍から、龍を象った電撃の塊を撃ち出している。アネモネの得意技、「雷竜覚醒・雷光牙」だ。サソリの全身に衝撃が伝わり、周囲の雪が接触の際に生じた爆煙で吹き飛ばされていく。

「いっきますよーッ！」

アネモネの全力はサソリの体力を確実に奪っていた。その隙にハツユキソウが全力の氷塊を召喚し、撃ち出す。サソリは断末魔を上げてその巨体を横たわらせた。

「ハツユキ隊長、ありがとうございます!!」

「みなさんっ！」

アネモネとハツユキソウが助けた調査隊の花騎士たちが、ハツユキソウに飛びつく。

「ぐすつ……えぐつ……」

調査隊の少女はハツユキソウに抱きつきながら泣いていた。余程怖い思いをしたのだろう。ハツユキソウは何も言わずにその女の子の頭を優しく撫でる。トリカブトはそれを見つめたまま近づくと、花騎士の一人が苦悶の表情を浮かべていることに気付いた。着地して駆け寄りてみれば、腕から血を流していたのが分かった。サソリの一撃を受けたのだろうか。

「ケガ、してるの……?」

「……大丈夫です。見た目ほど大したことはありません。ここからなら駐屯地も近いですし、私たち三人だけで向かえます」

トリカブトの問いに気丈な少女が、血を流していた少女に応急処置を施しながら応えた。手早く、慣れた手付きだ。元からそういった分野に詳しいのか淡々と独り言を言って応急処置を施していた。

「これでよし。ハツユキ隊長、私たちは迂回して安全な道から駐屯地へ行きます。ハツユキ隊長と皆さんは駐屯地の方に向かってください。赤いサンリと、空を飛ぶ花騎士^{フラワーナイト}があちらの方に向かっていきました」

——カトレア！

直感で彼女の零した言葉に気付く。カトレアはおそらく赤いサンリを追い始めたのだろう。

「トリカブト、そっちは終わったんだね」

「うん。でも、カトレアはまだあの赤いのと戦ってる……！ 私たちも行くこう！」

アネモネと短い会話の後で頷きあう。あの熱線を吐く赤いサンリは手強い。

「あ、あの！」

すぐに向かおうとした時、ハツユキソウがトリカブトを呼び止めてきた。

「どうしたの……？」

「……もしよければアレを倒すのに私も協力させてくれませんか……!? リベンジしたいんで

す。私の隊を傷つけたあのサソリに……！」

口調こそ弱々しく、頼りなさげだが……真剣な眼差しに心を打たれる。赤いサソリはたしかに手強い。カトレアの火球やアネモネの槍の一刺しを受けても倒れなかった。その申し出は実に魅力的だった。

「うん、力を合わせよう。私たちみんなの力を合わせれば、あの赤い害虫だってきつと倒せる……！」

アネモネがそう穏やかに語りかけた後。ハツユキソウの方へ右手を差し伸べた。

「……ありがとう。一緒に戦ってくれるなら心強いよ」
ハツユキソウはその手をしっかりと握りしめる。

「……はい！ 私、戦うのは怖いですけど……わたしにできることならなんだってします！ あんなのが暴れてたら、お城に逃げることで済ませんツ！」

同じ人類の敵に対して、力を合わせられることが嬉しくなる。トリカブトはそれに微笑んだ後でアネモネとともに、ハツユキソウの案内で駐屯地へと向かう。

「見えてきたの……！」

「私たち、ウィンターローズ王国騎士団のみんながいますツ！！」

黒いサソリたちを追う間に南下していたこともあり、駐屯地へ着くのにさほど時間はかからなかった。なだらかな稜線を越えると、次第に眼下に広がる雪原が景色に広がった。その奥に

駐屯地の砦が見えた。

「カトレアッ！」

その手前で赤いサンリとカトレアは戦っていた。カトレアはサンリの上空を旋回しつつ、得意の核熱魔法を操っている。彼女の持つ、魅力の魔杖まじょうから撃ち出される無数の火球の礫つぶてが、サンリをその場に押し留めていた。周囲には駐屯地所属の花騎士たちフラワーナイトが展開していたが、誰一人としてその戦いに介入していない。

《ふん。私の前に立ったんだから……暇つぶしにはなってくれらなうね、赤いのッ！》
トリカブトは交信魔石を励起れいきさせてカトレアの魔石と繋ぐ。彼女の不遜な口ぶりとともに放たれる炎が、赤いサンリの体を黒く無残に焦がしていく。その戦いはあまりにも苛烈すぎた。他の誰かが割って入れるようなものではない。……むしろ足手まといを嫌うカトレアのことだ。自分から周りに「手を出すな」と言ったのかもしれない。

しかし、このまま彼女一人で戦うのは負担が高いはずだ。アネモネが青のマフラーの下に忍ばせていた交信魔石に触れて叫ぶ。

「カトレア！ 私たちも加勢するから、その害虫を——！」

《必要ないッ！》

「えっ……!?」

返ってきた答えには圧倒的な自信と誇りが滲んでいる。突き放すようなその言葉にアネモネ

は意外そうな様子でいた。

《世界に愛された私の力なら、一人でもやれるはず……ッ！　そこでしつかり目に焼き付けなさいッ!!》

当のカトレアは意に介す様子ではなかった。激しい言葉とともに、炎の魔力光弾を次々と撃ち出していく。

それらのカトレアの魔法は、もはや攻撃と形容できるものではない。

爆撃だ。

核熱魔法の威力は高いが、大量の魔力を消費する諸刃の剣だ。しかし、カトレアは普段から「世界に愛されている」と豪語するように底なしの魔力を持っていた。やがて彼女の炎はサソリの体を焦がし尽くし、雪の大地に膝をつかせる。

《耐えられるかしら！　これが、^{スーパードラゴン}超新星の輝きよッ!!》

ひるんだサソリに対して今がチャンスと踏んだのか、カトレアは魔杖まじょうを振り上げて天を衝いた。その先に、紅く光る巨大な光球が一瞬にして生み出される。カトレアの得意魔法、「スーパードラゴン」だ。

光球からほとばしる波動が周囲の吹雪を溶かして行く。その様子は、まるで地上に生まれた小型の太陽だ。

「消え去りなさいッ！」

その自信に満ちた一喝のあとに、光の球がサソリへと降下して炸裂する。景色が一瞬暗くなつたあと、凄まじい爆風が吹き荒れた。その勢いとは離れているトリカブトたちにも伝わってくる。寒さを忘れさせるほどの熱波が伝わった後で目を開けると、抉り取られた地面の上に浮遊しているカトレアと、黒焦げのクレーターに倒れている赤いサソリの姿があつた。

——やっばりすごい……カトレア！

信頼を寄せているカトレアの活躍に心が湧きだつた。そして『スーパーノヴァ』の爆風が周囲の花騎士フラワーナイトと砦を巻き込んでいないことに気付く。カトレアは明らかに手加減をしていた。全力で『スーパーノヴァ』を撃てば間違ひなくこの周辺をまるごと吹き飛ばしていただろう。砦も花騎士たちも全て塵芥に変えてしまうぐらいに。

彼女の強さと、不器用ながらも周りの人を思いやる彼女の人は、後輩のトリカブトにとつて憧れの一つだつた。

「カトレアッ!!」

「ふええ……お強いですッ！ あんな人が世界にはたくさんいるんですか……!?」

トリカブトが頬を緩めて名を呼び、ハツユキソウが彼女の強さに素直に驚いた後で喜んでいった。トリカブトはカトレアのそばへ寄ろうと飛翔する。すべてのサソリは倒せた。戦いは終わったのだ。あの一撃を受けて立っていられる害虫などいない——！

「だめだ、油断しないでッ！」

しかし、浮つき始めた自分たちをアネモネが制した。

《ッ！》

カトレアの僅かに揺らいだ息遣いが魔石から聞こえる。と同時に、倒れていたはずの赤いサソリが空中のカトレアへ熱線を照射していた。

辛うじてカトレアはそれを紙一重で躲かすものの、声に焦りが含まれていた。

《……仕損じた？ この私がッ!》

「いや、よく見てッ!」

カトレアが信じられないように言い、アネモネがサソリの異変に気づいた。

サソリは生きていた。黒焦げとなったサソリの姿が突如二つに割れだし、中から傷痕一つない新たな体を晒した。脱皮したのだ。

「古い殻を盾にしたというの……!?!」

アネモネが息を呑む。間一髪生き延びていた赤いサソリは、古い殻を脱ぎ捨てた後で咆吼ほうごうを上げた。まるで、「まだ自分は生きているぞ」とカトレアに宣言するように。

「行こう、ハツユキソウさん、トリカブトッ! あれを放っておいたら……!」

「あ、あれと戦うんですか!? あんな強そうな人の魔法を受けて立っているヤツに!? 私には無理ですよっ!」

ハツユキソウの返答を待たず、アネモネが先行して跳んだ。慌ててばかりでいるハツユキソウ

ウを尻目にしつつ、トリカブトも続く。サンリはカトレアに対し、無数の熱線を乱射していた。回避運動を起こしてカトレアはそれらを躲かわすものの、サンリの狙いは正確だった。徐々に熱線がカトレアを捉えだす。

「雷龍覚醒——！」

手出しをさせるわけにはいかない。焼け焦げた地面を蹴り、一気に跳躍したアネモネがサンリの頭上を取った。彼女は、雷龍槍レイドウサに紫電をまとわせ、全力の技を解き放つ。

「夢幻、雷舞レイドウッ！」

アネモネの姿が、一瞬ブレた。それは残像でしか捉えられないほどに彼女が魔力推進で加速したことを示していた。直後、彼女は龍の稲光とともにサンリの懐へ飛び込み、すれ違いざまの一閃を何度も与える。連続で浴びせかけるアネモネの刺突は、サンリに反撃の隙すら与えない。

対害虫戦に向けてアネモネが作りあげた大技、『雷龍覚醒・夢幻雷舞』だ。

「ガブリエルッ——ッ！」

さらにトリカブトも権丈に戦意を載せる。即興のコンビネーションだ。アネモネの後にガブリエルガブリエルの大顎を射出した。

——弾かれた!?

しかし、トリカブトの思惑と裏腹にその一撃は通らなかつた。牙が届く前にサンリの尾がム

チのようにしなり、近づいた。ガブリエル^グをはたき落とす。

「うああっ……！」

その獣の顎が霧散すると同時に、自分の全身に激痛がのしかかった。思わず悲鳴が口から漏れる。汎用性が高い召喚魔法の唯一にして最大の弱点が、その痛みの正体だった。実体化させた「ガブリエル」はトリカブトの心の分身であり、攻撃を受けると操っているトリカブト自身にもそのまま跳ね返るのだ。トリカブトはうめきながら空中でバランスを崩してしまふ。

「トリカブトッ!!」

カトレアとアネモネの声が聞こえる。失いかけていた意識を引き戻し、権杖を支えにして立ち上がるうとしたときにはもう遅かった。赤いサソリが眼の前にまで迫っていた。大きく振り上げた右のハサミが振り上げられ、トリカブトは次に来る痛みを覚悟した。

「……?」

しかし、サソリのハサミがトリカブトの体を叩き潰すことはなかった。腰に誰かの腕が回り、自分の体が急に軽くなる。ハサミは虚しく空振りして、大地に突き刺さるだけにおわった。

「喋るなよ。舌を噛むぜ」

カトレアやアネモネではない。低く、雄々しい女の声だ。顔をあげると黒い和服を身にまとった女が、トリカブトを右腕だけで苦もなく抱え上げている。そしてサソリから離れたところで優しくトリカブトを降ろし、サソリの方に向き直った。

「あ、ありがとなの……けど、貴方は……？」

助けてくれた女に声を掛ける。王国騎士団の人間——？

「通りすがりの嫌われ者さ。覚えなくていい」

彼女は腰に佩はいていた長物……鞘に収まった太刀を左手に移して短く応じ、サンリに向かつて跳ぶ。

「まずは一発ッ！ 景気よくぶった切らせてもらっッ！」

一陣の風となった和服の女は、サンリが大地からハサミを引き抜くよりも前に太刀を振るつた。逆手で抜刀した無反射加工の刀身が巨大な尾を捉える。気がつくくと女の袈裟斬りが、サンリの尾の半ばから先をまるごと奪い取っていた。

ガギャアアアアアッ！

痛みからか、けたたましい叫びを上げてサンリが暴れだす。その断面部からは濁った黒い血——汚染害虫の血は汚染魔力の影響で泥のように粘りを持った黒い体液と化す——が噴水のように吹き出し、雪の白さを覆い隠すように染め上げていた。さらにブラックバツカラはサンリの右顔面に対し太刀の刀身を深く差し込んだ。一筋の傷痕がまるで焼印のように刻まれる。

その圧倒的でありながら流麗な剣さばきにトリカブトは目を見張った。女は外骨格の隙間に刀身を滑らせ、骨格筋ごと断ち切ったのだ。どれだけ硬い体を持つ生物でも、体を動かす以上構造的に継ぎ目となる部分がある。そこに正確に刃を入れたのだらう。しかし、それは容易な

ことではない。少しでも攻撃の入射角、動きのタイミングが合わなければ外骨格に阻まれてしまっていたはずだ。まさに神業といえる。

「どうした、もうおしまいか？」

サソリの苦し紛れの反撃をやすやすと躲し、巨体の目の前で着地した和服の女は挑発するように手招きをしていた。それを意に介さず、サソリは闇雲に暴れながらクレーターの外に出て、吹雪の奥へと逃げ去ってしまった。八脚の音が遠くなっていく。

「……なんだよつまらねえ。アタシは勝負を先延ばしにしたくない主義なんだがな」

女は軽いため息を吐いた後で太刀を再び腰に収めた。彼女は倒れている自分たちに目もくれない様子で、その場から離れようとしていた。

「あ、あの……！」

せめて、ちゃんとお礼は言いたい。自分を助けてくれた彼女を引き留めようとしてトリカブトは呼びかける。そのときだった。

「……待ち、なさい。ブラックバツカラ」

荒い息を吐いて立ち上がったカトレアが、尾が当たった右腕を抑えながら呼び止めていた。面識があるのか、一つの名を呟いている。

「……ブラックバツカラ？」

そして、カトレアの隣に歩み寄っていたアネモネがその名前を繰り返した。その後で訝しむ

ようにつぶやき始める。

「じゃあやっぱり、あの剣はもしかして……黒薔薇の太刀？」

「黒薔薇の、太刀……？　なんなの……それ……？」

初めて聞く名前だ。トリカブトの疑問にアネモネが答える。

「……噂で聞いたことがあるんだ。ウインターローズの最強の花騎士、死の薔薇が持つ黒い太刀。どんな害虫もたつた一人で討伐する、化物みたいな花騎士が持つって聞いたんだけど……じゃあ、あの人がブラックバツカラ……！」

アネモネの視線はブラックバツカラの腰に向けられていた。サソリに対して抜かれたあの刃の一撃は見事なものだった。もちろんそれは武器の切れ味だけではなく、使い手であるブラックバツカラの高い技量があつてのものだろう。たつた一振りですべて害虫を手負いにするその強さは、『化物』と評されても足りないくらいだ。

「……オイオイ、ひでえ噂だな。人を化物とかやめてくれよ。アタシはタダの人間で、一介の花騎士さ」

呼ばれた女性——ブラックバツカラがつまらなそうにため息を吐いて、カトレアの方へ向き直った。その細められた眼差しが一点を捉えた途端、カトレアの体がこぼばった。二人の視線が交錯する。

「……なあに睨みつけてんだ。言いたいことがあるなら聞いてやるぜ」

「……大アリよ！突然現れて、私の戦いを横取りにして……貴方はッー」

カトレアの顔には鬨かげりが差しており、刺々しい口調となっていた。

あの戦いはカトレアが啖呵を切り、一人で挑んでいたものだ。しかし、サソリを斃たおすことは叶わず、あまつさえ得物を取られてしまったのだ。今のカトレアには屈辱からくる怒りが渦巻いていた。

その様子を見たあとで、ブラックバツカラは一際大きいため息を吐いた。

「……ハッ。大口叩いておいてあのザマか。半端な戦いをして仲間の命も守れないってんなら、あんな口を叩く資格はねえよ」

「なんですって……ッー！」

「それが今のお前の事実だろ」

つまらなそうにブラックバツカラは続けた。

「お前の油断が、守るべき人の命を落としかけた。これは紛れもない現実だ。ハツタリかますくらいならもつと確実に敵に殺せるようにしろ。出なきや一人で戦うなんておこがましいことを口にするな。タカと一緒に自分の首も括くる気か？」

ブラックバツカラはそれ以上は話す気もないと言ったふうには、駐屯地の方へと踵きびすを返した。

「バカにしないで……！」

その態度はカトレアをさらに苛立たせてしまったらしい。憤いきどった彼女はその後を追おうと前

に踏み出す。だがその体はブラックバツカラに届くことはなかった。アネモネが肩を掴んで引き止めていたからだ。

「そこまでだよ、カトレア。私たちの任務は終わった。味方とケンカをすることが仕事じゃないでしょ」

「味方？ 現れるなりバカにするような物言いをする他人が味方っていうの!? 私の力は、あんなものじゃ——!」

「じゃあ離れたら、何をする気なの？」

真摯しんしに問い詰められた後で、やっとカトレアは落ち着いた。苦々しい表情を露あわにしたまま、焦げ茶色の地面を見つめている。

——カトレア……どうしてあんなに怒って……?」

彼女らしくもない、とトリカブトは思った。彼女は不遜で挑発的な言葉を口にするが、いつもは冷静で理知的な性格だ。そんな彼女が、あの程度の挑発で頭に血を昇らせるとは思えない。

「うう……害虫退散……害虫退散……!」

トリカブトがそこまで不思議に思っていたところで、それまですっかり忘れかけていた存在に気づく。ハツユキソウだ。彼女はクレーターの片隅で、額を地面につけてうずくまりながらプルプルと震えていた。

「……もう終わったの、ハツユキソウ」

トリカブトはハツユキソウに近づいて、安心させようとその背に触れる。

「つめた……ッ！」

その瞬間、人のものとは思えない冷たさに驚いてしまった。思わず触れた右手を反射的に引いてしまう。それに対し、立ち上がったハツユキソウが申し訳なさそうに頭を下げてきた。

「ああ！ ごめんなさいごめんなさい！ 私の体、魔力の制御がうまくいってなくて、ずっとこんな体なんです……驚かせてすみません……！」

「大丈夫……なんともないから」

必死な様子で謝ってくるハツユキソウに微笑み返す。花騎士だけが持つ魔力は世界花から授かるものであり、その制御には熟練を要する。しかし花騎士の中には、自身の魔力を上手く扱いきれず暴走させてしまう者もいた。ハツユキソウの低い体温は、おそらくそれらの内の一つだろう。

「……害虫はブラックバツカラが倒したの。ハツユキソウはみんなのところに行っておいで」
「……めんぼくありません……皆さんに助けられてばかりで、全然戦えなくて……」

自身の臆病さに悔しげな様子でいるハツユキソウに対し、優しく語りかける。

「ううん、ハツユキソウは頑張ったの。気にしないで」

自分だって、はじめての戦場になんとも思わなかったことはなかった。

花騎士はみんな、恐怖を勇気で押さえつけて戦っているのだ。

ハツユキソウのように臆病な子でも、世界花から魔力を授ければ戦いの道を国から選ばされる。彼女のような子が部下を無事に逃せただけでも大手柄だった。

彼女の背中を押し、ハツユキソウを駐屯地まで送り出した後で、トリカブトはカトレアたち二人の元へと戻る。周囲に害虫が潜んでいる様子は無い。そろそろ駐屯地へ戻ろうと考え始めた時、交信魔石から新たな声が聞こえてきた。

《こちら、駐屯地前。無事か？ みんな》

「団長……！」

耳に馴染んだ響き。それを耳にして、ざわついていた心が安らいでいく。自分たち、セントフロレス騎士団を取りまとめる団長の声だ。

《そっちの状況はどうなっている？ 報告してくれ》

「うん……被害は最小限に食い止めることが出来たよ。でも——」

隊長を務めるアネモネが簡単な報告を済ませる。汚染害虫の最後の一匹が逃げたことを伝えた後で、彼は数瞬だけ間をおいて優しく告げる。

《……了解。とりあえず、終わったなら一緒に王都へ戻るぞ。あとの警戒とサソリの搜索は王国騎士団にまかせておけ》

「王都に？ でも予定じゃこの駐屯地で調査って……」

《事情が変わったんだ。女王陛下……ノヴァーリスが俺たちにお礼を言いたいらしい》

「……分かった。今からそっちに行くね」

アネモネが交信を終えた後。三人は武器を収めて駐屯地へ向かった。程なくして見えた正門に、マントをまとった青年が見えた。白と紺碧こんぺき、二色をベースとした騎士服をまとい、腰には護身の片手剣を提げている。

間違いない。団長だ。

「団長！」

トリカブトは大好きな彼へ無邪気に飛びついた。彼の胸の中で自分の体が優しく受け止められる。彼の体は暖かった。

「お帰り、トリカブト。今日もよく頑張ったな」

「うんッ！」

無事に砦を守りきり、彼に再び会えたことを喜ぶ。団長の元に帰れた事がとても嬉しい。

「アネモネとカトレアも、お疲れ」

彼は二人にもねぎらいの言葉をかける。しかし、対する二人の表情は神妙なものだ。

当然だ。自分たちは汚染害虫を逃してしまった。彼らを倒すために国を渡ってきたというのに。それを自覚してトリカブトも目線を下げてしまう。

「あ……うん。でも……」

この戦いで、自分たちの目的は果たせていない。汚染害虫の討伐を。

「……気にするなつて。失敗なんでものは取り返せばいい。それに、誰かの命を守れたならそれだけでも十分さ。……つと。とにかく早く戻るぞ。あまり女王を待たせるわけにも行かないからな」

トリカブトらはそれに応えて武器を収める。そして団長とともに待たせていた馬車へと乗り込んだ。王都に向かって馬車が揺れる間、トリカブトはカトレアの顔を眺める。彼女の顔はブラックバツカラの言葉の後からずつとうつつむきがちだったからだ。

——カトレア……なにもないといけれど……

余程ブラックバツカラの言葉が心に刺さつたのだろうか？　しかし、今の表情にはそれだけじゃない理由があるような気がしていた。

今のカトレアははそつとしておく方がいいだろう。

トリカブトは何も言わず、それきり無言で馬車が止まるのを待った。